

## 国際哲学研究センターシンポジウム司会報告

著者	辻内 宣博
雑誌名	国際哲学研究
巻	7
ページ	19-22
発行年	2018-03
URL	<a href="http://doi.org/10.34428/00009787">http://doi.org/10.34428/00009787</a>



## 国際哲学研究センターシンポジウム司会報告

辻内 宣博

2017 年 12 月 16 日（土）13:00～18:00 に、「哲学と歴史学とを生涯学習として学ぶ意義」と題して、哲学・歴史学・教育学を専門とする 3 名の先生方にご講演をいただいた。その後、3 名の先生方での質疑応答を行った後に、フロアの聴講者の方々からいただいたコメントシートに基づいて質疑応答をしていただき、最後に、フロアの聴講者の方々との直接のディスカッションを行った。

まず、哲学の領域からは、京都大学理事・副学長である川添信介先生（西洋中世哲学を専門領域とする）に、「哲学——自由になるための学び」と題して、次に、歴史学の領域からは、東京大学教授である高山博先生（西洋中世史を専門とする）に、「中世地中海から現代世界を見る」と題して、最後に、教育学の領域からは、東洋大学教授である矢口悦子先生（生涯教育を専門領域とする）に、「生涯学習では哲学や歴史学をどのように学んできたか」と題して、お話をしていただいた。なお、3 名の先生方の略歴と主要業績については、最後に簡便に記載させていただいた。

また、3 名の先生方には、当日ご講演いただいた内容を踏まえながら、お話をまとめていただいたものをご報告いただいているので、具体的な内容については、その報告を是非ともご一読いただければ幸いである。ここでは、このシンポジウム企画の趣旨をご報告させていただき、後の 3 名の先生方の報告と繋げることを試みたい。

昨今、さまざまな媒体において、「人文学の危機」という論調を目にする機会が多くなってきた。自然科学や社会科学といった学問領域は、現在われわれが生活しているこの自然的世界や人間社会を直接の対象として分析し、その成果は、かなり目に見えやすい仕方で、現在のわれわれの世界理解に貢献しているように見える。しかし他方で、人文学という学問領域は、過去の間人が生み出してきた精神的世界を対象として分析するため、その成果が現在のわれわれの生や世界理解に貢献するのかどうかは、非常に見えにくい。したがって、現在の社会にあっては、人文学の教育や研究は、もはやその意義や意味をもたないように思われる。しかし、はたして本当にそうなのだろうか。

以上のような文脈の中で、日本の大学が設立された当初から人文学の領域で研究されて学ばれてきた「哲学」と「歴史学」に焦点を当て、改めて、これらの学問を教育研究する意義について考え直してみたいということが、本シンポジウムを企画した意図である。しかしながら、「哲学」と「歴史学」とを学ぶ意義をただ改めて考え直すというのではなく、「生涯学習」という観点から、これらの学問を学ぶ意義について、いわゆる学校教育という枠組みを越えて問い直してみたいと考え、今回のシンポジウムを企画立案したのである。

こうして、それぞれの領域でベテランの先生方に、これまでの研究や教育の経験を踏まえながら、人が生涯にわたって「哲学」や「歴史学」を学ぶ意義はどういったところに見出すことができるのかをテーマにお話しいただきたいと依頼させていただいた。そして、それぞれの専門領域から出てきた見解を、こんどは、生涯学習の一般的な議論の俎上に載せてみたときに、どういった見解のずれが出てくるのか、あるいは、かなりの程度で一致するのか、といったことを検討してみることを想定していた。その結果がどうなったのかは、是非とも、各先生方の報告を見ていただきたい。

なお、司会者として、当日の議論の流れを見てきた立場から感想めいたことを一つ述べさせていただくと、次のようなことが、各先生方の共通の見立てとして出てくるのではないと思われる。それは、われわれが生きているこの現在の世界や社会、そして自分自身の在り方から少し距離を置いて、広く自分自身や社会、世界全体を見通す視点を確保することが、哲学や歴史学、ひいては人文学を生涯学習として学び続ける意義として見いだせるのではないか、ということである。つまり、われわれがこの世界を生きていくとき、目の前の出来事にあまりにも目を捕らわれて拘泥しすぎると、既成の価値観や世界観の枠組みという檻の中でしか物事の識別や判別ができない。しかしながら、こうした狭小な視野からは、真実や真理を見失う恐れが非常に高くなる。そこで、人文学が果たすことのできる役割とは、これまで人間が長い年月をかけて培ってきた知的な営為を汲み取ることによって、現在の人間の在り方や社会の在り方、ひいては世界全体の在り方を見る視野を拡げて、世界の見方を相対化していくことにあると言えるだろう。その結果、現在の自分自身や社会、そして世界の在り方を自己反省的に捉え直す視点が拓け、こうして、未来へと歩んでいくわれわれの生を導く新たな真なる道を見出す可能性も見えてくるだろう。

われわれ人間は、確かに物質的な要素から構成される自然的・物理的存在の一部であることは疑いえない。その限りでは、自然科学や社会科学の学問的成果は、現在のわれわれの生にとって非常に有益であり有効であるだろう。しかしながら、他方で、進化のプロセスの結果であるとしても、われわれ人間は確かに、物事を思考によって捉えて分析し、理解するという形で世界に関与する存在でもある。こうした精神的／思惟的な仕方によって、本質的に人間が世界との関わりをもつ以上、その力を最大限に発揮するためには、人文学の成果を学ぶことによって、「いま・ここ」の視点に拘束されない、多角的で広範な視野に立つための素材を手にすることが必要である。そのための格好の題材の一部が「哲学」や「歴史学」であることは疑いえない。だからこそ、生涯にわたって学び続けるものとして、「哲学」や「歴史学」、ひいては、「人文学」という学問領域は欠かすことのできないものだと考えることができるのである。

## 講演者の略歴と主要業績

### ■ 川添 信介（京都大学）【哲学】

#### ● 略歴

- 1983 年 京都大学大学院 文学研究科 博士後期課程研究指導認定退学
- 1983 年 フランス パリ第 10 大学（ナンテール校）留学
- 1985 年 大阪市立大学 文学部 助手
- 1988 年 大阪市立大学 文学部 講師
- 1991 年 大阪市立大学 文学部 助教授
- 1996 年 京都大学大学院 文学研究科 助教授
- 2004 年 京都大学大学院 文学研究科 教授
- 2014 年 京都大学大学院 文学研究科長・文学部長
- 2015 年 京都大学 理事・副学長
- 2015 年 中世哲学会 会長

#### ● 主要業績

- 『水とワイン——西欧 13 世紀における哲学の諸概念』（2005 年）京都大学学術出版会.
- 『トマス・アキナスの心身問題——『対異教徒大全』第 2 巻から』[翻訳と註解]（2009 年）知泉書館.

### ■ 高山 博（東京大学）【歴史学】

#### ● 略歴

- 1988 年 東京大学大学院 人文科学研究科 博士課程 単位取得退学
- 1990 年 アメリカ エール大学大学院 歴史学 博士課程修了（Ph.D.取得）
- 1990 年 一橋大学 経済学部 助教授
- 1993 年 東京大学 文学部 助教授
- 2004 年 東京大学大学院 人文社会系研究科 教授
- 2008 年 文部科学省 科学官
- 2015 年 西洋中世学会 会長
- 2016 年 史学会 理事長

#### ● 主要業績

- 『中世地中海世界とシチリア王国』（1993 年）東京大学出版会. [第 15 回サントリー学芸賞（思想・歴史部門）；第 2 回地中海学会賞；第 17 回マルコ・ポーロ賞]
- *The Administration of the Norman Kingdom of Sicily* (1993) E.J.Brill.
- 『神秘の中世王国——ヨーロッパ，ビザンツ，イスラム文化の十字路』（1995 年）東京大学出版会.
- 『ハード・アカデミズムの時代』（1998 年）講談社.
- 『中世シチリア王国』（1999 年）講談社現代新書.
- 『歴史学 未来へのまなざし——中世シチリアからグローバル・ヒストリーへ』（2002 年）山川出版社.

- 『〈知〉とグローバル化——中世ヨーロッパから見た現代世界』(2003 年) 勁草書房.
- 『文明共存の道を求めて——地中海世界から現代をみる』(2003 年) 日本放送出版協会.
- 『ヨーロッパとイスラーム世界』(2007 年) 山川出版社.
- 『中世シチリア王国の研究——異文化が交差する地中海世界』(2015 年) 東京大学出版会.
- 「紫綬褒章」受章 (2016 年)

## ■ 矢口 悦子 (東洋大学) 【教育学】

### ● 略歴

- 1986 年 お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 博士後期課程 単位取得退学
- 2000 年 山脇学園短期大学 教授
- 2003 年 東洋大学 文学部 教授
- 2015 年 東洋大学 文学部長

### ● 主要業績

- 『イギリス成人教育の思想と制度——背景としてのリベラリズムと責任団体制度』(1998 年) 新曜社.
- 『社会教育・生涯学習辞典』[共編著] (2012 年) 朝倉書店.
- 『地域を支える人々の学習支援——社会教育関連職員の役割と力量形成——』[共編著] (2015 年) 東洋館出版社.